

5 参考資料

別表1および2において、(注)により、参考とすべき事項は以下のとおり。
なお、農業気象災害対策関係の参考資料は農業技術課のホームページを参照する。

<http://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/kisyousaigai.html>

○ 農作業安全チェックシート 21

○ 山梨県環境保全型農業推進ガイド（平成20年3月）

II 環境保全型農業を目指した先進的な技術

2 有機性資源の利用

(3) たい肥化技術 23

(4) 施用方法 27

○ 持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針（平成20年4月）

第2 持続性の高い農業生産方式について 29

第3 持続性の高い農業生産方式の一覧表 31

(注1) 農作業安全の取組内容

果樹・野菜のNo. 25、水稻のNo. 13に対応

※確認・実施にあたっては、農作業安全チェックシート（参考様式）を活用してもよい

○役割分担・情報共有

- ・家族で安全な農作業について話し合っている
- ・一人に負担が集中しないよう役割分担をしている
- ・家族の体力や体調に応じた作業分担を考慮している
- ・畑や農道等の危険箇所の情報を家族で共有している
- ・作業場所や作業内容をお互いに伝え合っている

○危険箇所の把握

- ・畑への移動で通行する農道などの危険な場所を把握している
- ・畑の凹凸、畦の崩落などを常に確認し、すぐに補修している
- ・畑の境界、接触しそうな枝や支柱に目印を付けている

○機械の点検

- ・日頃からブレーキや安全装置の点検と動作確認をしている
- ・燃料給油時や点検、補修時には必ずエンジンを停止している
- ・機械を始動・運転する際は周囲の安全を確認している

○作業の準備

- ・十分に睡眠や休息をとって疲れを残さないようにしている
- ・ゆとりある作業に心がけ、無理な計画にならないようにしている
- ・機械に巻き込まれないよう作業に適した服装をしている
- ・緊急時の連絡に備えて携帯電話を持っている

○作業前

- ・作業を行う周囲に人がいないか安全確認を行っている
- ・周辺の人が危険にさらされないよう作業前に声かけをしている
- ・高所など危険を伴う作業は必ず複数人で行っている

○機械の操作、作業上の留意点

<管理機（耕耘機）>

- ・後進時は、回転を下げ、ハンドルをしっかり押さえて、周囲や後方の状況に注意する
- ・支柱、誘引ワイヤーなどに挟まれたり衝突する恐れがあるので、余裕のある距離を保つ
- ・けん引時に急旋回すると転倒する恐れがあるので、速度を下げ、緩やかなハンドル操作を行う

<刈り払い機>

- ・安全靴、保護メガネなどを着用する
- ・刈刃のひび割れ等を点検し、異常がある場合は交換する
- ・刈刃は確実に固定する
- ・飛散物保護カバーを装着する
- ・刈り草の巻き付き、詰まりを取り除くときは、必ずエンジンを停止する

<トラクター・農薬散布車>

- ・走行時にスピードを出しすぎない
- ・畦などへの乗り上げ、脱輪による転倒、路肩からの転落に注意する。
- ・走行時は左右のブレーキを連結する
- ・アタッチメント交換等の作業では、油圧をロックし、エンジンを停止する

<高所作業車>

- ・凹凸や傾斜のある場所では、転倒の恐れがあるので使用しない
- ・作業台を上げたまま走行しない
- ・昇降時、移動時には枝や支柱等との接触、挟まれ事故に注意する

<脚立での作業>

- ・安定した場所に設置し、必ず開脚防止チェーンを掛けて使用する
- ・作業を安定した体勢で行うため、こまめに移動し絶対に無理な体勢で作業しない

(参考様式) 農作業安全チェックシート

農作業安全チェックシート

今、私たちにできる事故防止
「作業前、少しのゆとりで安全チェック!!」

家族と一緒に、安全項目を確認することも重要です

まずは家族で確認を

- 作業で安全な農作業について 日頃から話し合っている
- 一人に責任が集中しないよう 役割分担をしている
- 作業の体力や体調に応じた 作業分担を考慮している
- 畑や農道の危険箇所の情報を 家族で共有している
- 作業場所や作業内容を お互いに伝え合っている

チェックしてみよう

畑に出かける前に

- 十分に睡眠や休養をとって 疲れを癒さないようしている
- ゆとりある作業に心がけ、 無理な計画にならないようしている
- 機械に巻き込まれないよう 作業に適した服装をしている
- 緊急時の連絡に備えて 携帯電話を持っている

畑で作業を始める前に

- 作業を行う圃田に入っていないが 安全通路を行っている
- 周辺の人が意識にさらされないよう 作業音に声をかけている
- 高所など危険を伴う作業は 必ず複数人で行っている

農作業は、 怠らず、急がず、慎重に!

農作業機械の使用前に

- 日頃からブレーキや安全装置の 点検と動作確認をしている
- 燃料給油時や自給、補給時には 必ずエンジンを停止している
- 機械を始動・運転する際は 周囲の安全を確認している

機械操作、作業上の注意点は裏面で確認

山梨県農作業安全推進会議

機械操作、作業上の留意点

農作業事故は、農作業機械の使用、高所作業中に多く発生しています。 機械操作の注意に加え、日頃から、 通常の環境整備も心がけましょう!

管理機(耕耘機)

- 復土する時はハンドルが持ち上がり やすく、転倒や背後の木や支柱と挟ま れる事故が多くなっています。
- 復土時は、回転を下げ、ハンドルを しっかりと押さえ、周囲や後方の状 況に注意する。
- 衝突や挟まれる恐れがあるので、 支柱、誘引ワイヤーなどは、余裕 のある距離を保つ。
- けん引時に、急戻ると転倒する 恐れがあるので、速度を下げ、緩や かなハンドル操作を行う。

刈り払い機

- 安全靴、保護メガネなどを着用する。
- 刈刃のひび割れ等を点検し、 異常がある場合には交換する。
- 刈刃は確実に固定する。
- 飛散物保護カバーを装着する。
- 刈り草の巻き付き、詰まりを取り除 くときは、必ずエンジンを停止する。

トラクター・農薬散布車

- 走行中にスピードを出しすぎない。
- 畦などへの乗り上げ、脱輪による 転倒、路肩からの転落に注意する。
- 走行時は左右のブレーキを連結する。
- アタッチメントの下の作業では、 油圧をロックし、エンジンを停止する。

高所作業台

- 凹凸や傾斜のある場所では、転倒の恐 れがあるので使用しない。
- 作業台を上げたまま走行しない。
- 昇降時、移動時には、枝や支柱等 との接触、挟まれ事故に注意する。

脚立での作業

- 安定した場所に設置し、必ず開脚 防止チェーンを掛けて使用する。
- 作業を安定した体勢で行うため、こ まめに移動し、絶対に無理な体勢で 作業しない。

(注2) 山梨県環境保全型農業推進ガイド(平成20年3月) 抜粋

II 環境保全型農業を目指した先進的な技術

2 有機性資源の利用 (3) たい肥化技術 (4) 施用方法

果樹・野菜のNo. 6および21、水稻のNo. 7、10に対応

(3) たい肥化技術

ア たい肥化の目的

有機物施用は肥料成分の補給、土壌の物理性・微生物性の改良等の良い影響をもたらす。新鮮有機物や未熟たい肥を施用すると土壌微生物による有機物の分解が急激に進み、根圏土壌の酸素不足やアンモニアガスが発生する。また、炭素率の高い有機物では土壌中の窒素が逆に有機物中に取り込まれるため窒素飢餓となり、作物生育が妨げられる。

したがって、有機物の分解を予め進めて品質を安定化し、施用に際しての害を少なくするためにたい肥化が行われる。その他、有機物中に含まれるフェノール物質等有害な成分を分解したり発酵熱により、雑草種子を死滅させるなどの効果もある。

イ たい肥化のポイント

たい肥化には多種多様な微生物が関与しており、うまくたい肥化するためには、多くの微生物が働きやすい環境を次に挙げる項目に注意して整備する。

(ア) 資材の炭素率

30~40 がよい。窒素が少ないと分解が進みにくく、多いと過剰窒素が放出され無駄となる。窒素不足の時は石灰窒素や家畜ふん尿を、窒素過多の時はオガクズやわら類を添加する。

(イ) 水分

60%程度がよい。多いと嫌氣的になりやすい。水分が多い場合はオガクズやわら類を、少ない場合は水や家畜ふん尿を添加して調整する。

(ウ) 孔げき量 (すき間)

2.0~2.5L/kg がよい。孔げき量が多いと熱が逃げやすくまた通気が良いため嫌気性菌の活性が低下し、少ないと好気性菌の活性が低下する。孔げき量が多い場合は踏み込みを行い、少ない場合は他の資材を混合したり、ふんわりと積み込む。

(エ) 切返し

酸素補給、過熱防止、均一な発酵のためときどき切返しを行う。切り返しの時期が早すぎると温度が低下して、高温性菌の活性が低下する。反対に切り返しが遅れ、70℃が1週間以上続くと、「焼けた」状態になり品質が低下する。

ウ 各種有機物資源のたい肥化技術

(ア)家畜ふん

家畜ふんには牛ふん、豚ふん、鶏ふんなどがあるが、たい肥化技術については基本的にはほぼ同じで、わら、おがくずなどを混合してつくる。敷料を含まない鶏ふん、豚ふんは粗大有機物の発酵資材として利用する。

畜舎内から敷わらとふんを一緒に出し、水分を 55~60%に調整したのち堆積し、堆積 2~3 週間後に第 1 回目、その後は 3~4 週間毎に切返しを行ない、夏期で 2 ヶ月、冬期では 3~4 ヶ月で完成する (図 13)。

牛ふんでは窒素の揮散を抑え分解を促進するために過りん酸石灰を添加する。

注意点としては以下があげられる。豚ふんや鶏ふんでは炭素率が低いため、炭素率の高いわら類を多目に入れる。オガクズを混合する場合は、家畜ふん 2 倍量以下とし、好気発酵後、更に数カ月後熟 (堆積) し木質物の性状を安定化する。

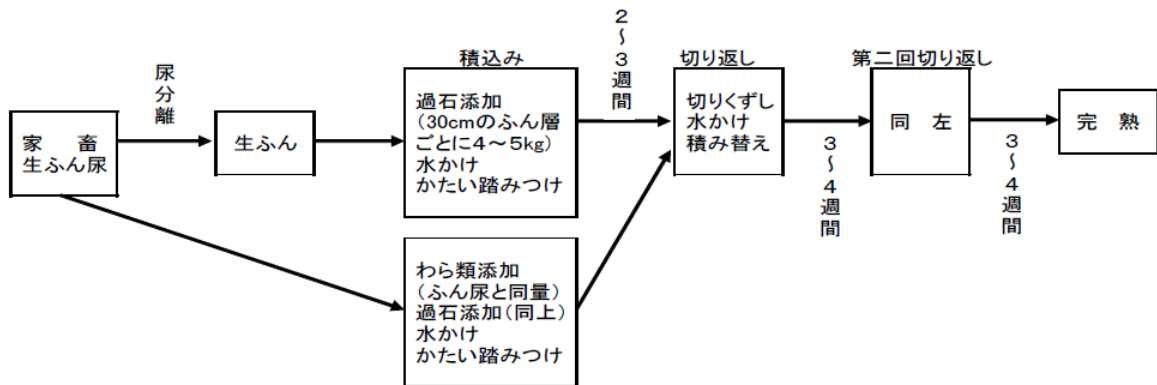


図 13 家畜ふんたい肥の作り方 (橋元)

また、完熟たい肥と生ふんを混合すれば短期間で良質のたい肥が作られる。完熟たい肥がない場合は、まずタネたい肥を作る。生ふんを天日乾燥後、2 週間ほどの間に 3~4 回切返しを行い水分が 40%程度になるまで堆積する (図 14)。これをタネたい肥として利用し、生ふんと 1:1 の割合で混合する。混合堆積後、たい肥の温度は 1~2 日で 70℃に達し 3 日に 1 度切返しを行えば、牛ふん、豚ふんでは 2~3 週間てたい肥が完成する。たい肥の半分をタネたい肥として利用し、その後は連続してたい肥化処理を行う。

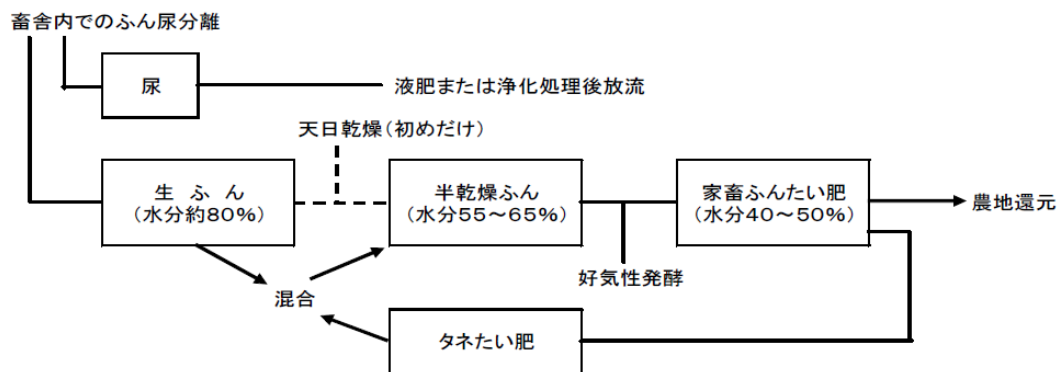


図 14 家畜ふんの連続たい肥化処理法 (松崎)

(イ) わら類

わら類の炭素率は稲わらで65、麦わらで100~130と高く、水分は10~15%と低い。石灰窒素、鶏ふんなどで窒素成分を補い炭素率を調整する。このとき、セルロースを分解する嫌気性菌は通気が良すぎると十分に増殖しないので、水をかけながら踏み込んで堆積する。温度が上昇したら1~2週ごとに切返しを行なうと、3ヶ月で完熟したたい肥になる。

(ウ) モミガラ

炭素率は75、水分は12%前後であり、たい肥化の方法はわら類とほぼ同じである。豚の敷料として用いたものは、豚ふんに含まれる易分解性物質と良好な通気性により高温発酵するため、切返しをまめに行うなど、温度管理に注意が必要である。

(エ) オガクズ、樹皮

炭素率はモミやトウヒなどの針葉樹は1000前後、ブナやカバなどの広葉樹では500前後であり、抗菌性の強い成分や樹脂分は針葉樹や心材に多い。したがって、針葉樹よりも広葉樹のほうが、また心材よりも辺材（樹皮）のほうが分解が早い。炭素率が高く分解しにくいいため、家畜ふん尿と混合すると初期の発熱発酵の際に生育障害を起こす物質はほとんど分解される。しかし、木材部の分解は発熱がおさまってから徐々に進むため、6ヶ月以上の堆積が必要である。また、辺材のみを野積みにする場合は、広葉樹は1年、針葉樹では3年程度の堆積が望ましい。

(オ) 食品残渣等（茶かす、コーヒーかす、おから、厨芥類）

食品残渣は水分含量が高く、それだけで堆積したのではうまくたい肥化しない。そのため天日乾燥を行うか、水分含量の低い有機物を副資材として添加し通気性を良くしてからたい肥化する。副資材としては、米ぬかなど細かいものは通気が悪くなりやすいので、モミガラやオガクズなど粗いものを添加して堆積するとよい。

茶かす、コーヒーかすは悪臭を抑制する効果があるため、家畜ふんと の混合も適している。

家庭で簡単に行えるコンポスターを用いる厨芥（生ゴミ）のたい肥化は、土壤に水分を吸収させて水分調整する原理なので、厨芥類をそのまま入れるだけで良いが、モミガラ等を加えると水分状態および通気性が改良され腐熟は進む（図15）。油があると発酵しにくく、また、ナトリウムが多すぎると植物に悪影響を及ぼすので、食用油そのものや塩分の多いものを多量に入れてはならない。

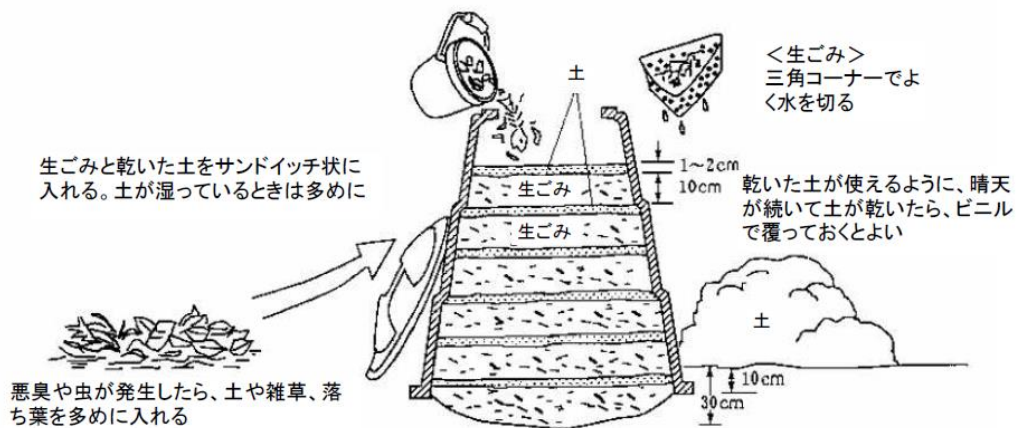


図15 コンポスターによる厨芥のたい肥化（伊達）

(カ) 果樹剪定枝

せん定枝は園内で生産され、簡単に入手できる有機物である。ブドウ、モモの成園のせん定枝量は 10 a あたり 250~350kg（容積約 1000L）である。山梨県全体では年間 25 千トンのせん定枝が発生する。未利用有機物の有効活用や焼却による大気汚染防止の観点から堆肥として果樹園にリサイクルし有効利用する。

堆肥化に際しては、まずせん定枝を専用粉砕機で長さ 2~3 cm 程度に細かく粉砕する。その後、C/N率が 30 程度になるように窒素分を補給する。窒素源は鶏ふんを使用し、粉砕したせん定枝 300kg 当たり 30~40kg、太枝の多い場合は 50kg の鶏ふんを加える。また、場合に応じてオガクズやわら類を添加してもよい。堆肥化開始時に水分は 60%、孔隙量は 2.0~2.5 L/kg となるように調整する。

乾燥すると堆肥化は停止するので定期的にかん水する。2~3ヶ月おきに合計 3 回切り返しを行なうと、酸素が入り分解が進み 5~8ヶ月で堆肥化は終了する（表 18）。堆肥化中はカブトムシやコガネムシの幼虫が入り込みやすいのでビニールで表面を覆う。

表 18 ブドウせん定枝の a) 堆肥化に及ぼす切り返し作業と水分補給回数の影響

（果樹試験場、平成 16 年度試験）

処理回数	終了時分析値				b) コマツナ試験	
	C (%)	N (%)	C/N 率	体積 (L)	水分含量 (%)	N 吸収量 (mg)
0 回	44.5	1.7	26.0	690	26.8	7 (30)
1 回	44.2	2.9	15.4	630	55.4	13 (58)
3 回	42.5	3.9	10.8	420	79.1	30 (136)

a) 専用チップパーにより粉砕したブドウせん定枝 (C48.7%, N0.83%, C/N58.8, 水分 56.3%) に鶏ふん 30kg を混和、水分 65% に調整し、屋外、1000L 堆積、ビニール被覆の条件で H16 年 3 月 30 日に堆肥化を開始し、11 月 12 日に終了した。切り返し時に各 70L をかん水した。b) 760ml ポット内土壌に化成肥料 N5g、各堆肥 10g を混和しコマツナを 21 日間栽培後、吸収窒素量から堆肥の腐熟度を判定する。()内は堆肥を添加しない場合の窒素吸収量を 100 として示した。

エ 腐熟度判定法

たい肥の製造過程において、完熟したたい肥の成否を客観的な指標で判断できれば良質な自家製たい肥を経験に頼らずに製造できる。このための判定法として20近くの方法が考案されている。最も正確な方法は実際に小型ポットに作物を栽培し、生長量を観察することであるが、判断に長時間がかかり実用的でない。その他、幼植物試験法や花粉管成長試験法がたい肥の腐熟度を正確に判定する方法として知られている。ここでは現場で容易に実施可能な外観による評価法を紹介する。

この方法では、たい肥の状態に現場で表19にしたがって評点を与え、合計点が30点以下は未熟、31～80点は中熟、81点以上は完熟と評価する。各項目を適切に評価できれば信頼のおける結果が得られる。

表19 外観による腐熟度判定基準（原田）

色	黄～黄褐色(2)、褐色(5)、黒褐色～黒色(10)
形状	現物の形状をとどめる(2)、かなりくずれる(5)、ほとんど認められない(10)
臭気	ふん尿臭強い(2)、ふん尿臭弱い(5)、たい肥臭(10)
水分	強く握ると指の間からしたたる…70%以上(2)、強く握ると手のひらにかなりつく…60%前後(5)
	強く握っても手のひらにあまりつかない…50%前後(10)
堆積中の最高温度	50℃以下(2)、50～60℃(10)、60～70℃(15)、70℃以上(20)
堆積期間	家畜ふんだけ……………20日以内(2)、20日～2ヶ月(10)、2ヶ月以上(20)
	作物収穫残渣との混合物…20日以内(2)、20日～3ヶ月(10)、3ヶ月以上(20)
	木質物との混合物……………20日以内(2)、20日～6ヶ月(10)、6ヶ月以上(20)
切返し回数	2回以下(2)、3～6回(5)、7回以上(10)
強制通気	なし(0)、あり(10)

注 ()内は点数を示す
これらの点数を合計し、未熟(30点以下)、中熟(31～80点)、完熟(81点以上)とする

(4) 施用方法

ア 家畜ふんたい肥

(ア) 施用量

野菜では基肥として牛ふんたい肥を1～2t/10a、鶏ふん、豚ふんたい肥を300～500kg/10a、果樹では収穫後の礼肥として牛ふんたい肥を0.5～1t/10a、鶏ふんを100～150kg/10a 施用する。水田では牛ふんたい肥を0.5～1t/10a、鶏ふんを200～500kg/10a 施用する。

(イ) 施用位置

野菜では土壌表面に全面散布後、深さ10cmまで混和する。果樹では土壌表面に全面散布後、土壌と5cm程度混和する。家畜尿は土壌表面にむらのないように全面散布する。

(ウ)施用上の注意点

- ・ たい肥中の窒素の肥効率は、牛ふんたい肥が 10～20%、豚ふんたい肥が 20～40%、乾燥鶏ふんが 70%、発酵鶏ふんが 10～40%であるので、作物の養分吸収特性と適合したものを選び、適合しない場合は他の資材を併用して調節する。
- ・ 資材中の有効成分を考慮し、他資材の施用量をその分減らすことによって最終的な施肥養分量が過剰にならないように注意する。

イ 食品残渣たい肥

(ア)施用量

たい肥として完熟したものは野菜、果樹で元肥として 500～1,000kg/10a 施用する。水田では、分解調整が困難なため通常は使用しない。

(イ)施用位置

野菜では土壌表面に全面散布後、深さ 10cm まで混和する。果樹では土壌表面に全面散布後、土壌と 5cm 程度混和する。

(ウ)施用上の注意点

- ・ 腐熟度にもよるが緩効的な窒素肥効をしめすものが多い。
- ・ 大量に施用する場合は資材中の有効成分を考慮し、他資材の施用量をその分減らすことによって最終的な施肥養分量が過剰にならないように注意する。
- ・ 分解が不十分なたい肥を施用する場合は、生育不良になりやすいので、施用後 1 ヶ月以上おいてから播種する。

(注3) 持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針（平成20年4月）

第2 持続性の高い農業生産方式について

1 「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律施行規則」で定める技術（一部抜粋）

第3 持続性の高い農業生産方式の一覧表（抜粋）

果樹・野菜のNo. 17～19、水稻のNo. 6～8に対応

1 「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律施行規則」で定める技術

(1) たい肥その他の有機質資材の施用に関する技術であって、土壌の性質を改善する効果が高いもの。

ア) たい肥等有機質資材施用技術

土壌有機物含有量、可給態窒素含有量その他の土壌に性質について調査を行い、その結果に基づき、たい肥その他の有機質資材であって炭素窒素比がおおむね十から百五十の範囲にあるものを農地に施用する技術をいう。

イ) 緑肥作物利用技術

土壌有機物含有量、可給態窒素含有量その他の土壌の性質について調査を行い、その結果に基づき、緑肥作物を栽培して、農地にすき込む技術をいう。

(2) 肥料の施用に関する技術であって、化学的に合成された肥料の施用を減少させる効果が高いもの。

ア) 局所施肥技術

肥料を作物の根の周辺に集中的に施用する技術をいう。

イ) 肥効調節型肥料施用技術

肥料取締法（昭和二十五年法律第二百二十七号）第二条第二項に規定する普通肥料（以下「普通肥料」という。）のうち、アセトアルデヒド縮合尿素、イソブチルアルデヒド縮合尿素、オキサミド、被覆加里肥料、被覆窒素肥料、被覆複合肥料、ホルムアルデヒド加工尿素肥料若しくは硫酸グアニル尿素、これらの肥料の一種以上が原料として配合されるもの又は土壌中における硝酸化成を抑制する材料が使用されたものを施用する技術をいう。

ウ) 有機質肥料施用技術

有機質（動植物質のものに限る。）を原料として使用する普通肥料を施用する技術をいう。

(3) 有害動植物の防除に関する技術にあつて、化学的に合成された農薬の使用を減少させる効果が高いもの。

ア) 機械除草技術

有害植物を機械的方法により駆除する技術をいう。

イ) 除草用動物利用技術

有害植物を駆除するための小動物の農地における放し飼いをを行う技術をいう。

ウ) 生物農薬利用技術

農薬取締法（昭和二十三年法律第八十二号）第一条の二第二項の天敵であつて、同法第二条第一項又は第十五条の二第一項の登録を受けたものを利用する技術をいう。

エ) 対抗植物利用技術

土壌中の有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止する効果を有する植物を栽培する技術をいう。

オ) 被覆栽培技術

農作物を有害動植物の付着を防止するための資材で被覆する技術をいう。

カ) フェロモン剤利用技術

農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とする薬剤であつて、農薬取締法第二条第一項又は第十五条の二第一項の登録を受けたものを使用する技術をいう。

キ) マルチ栽培技術

土壌の表面を有害動植物のまん延を防止するための資材で被覆する技術をいう。

ク) 温湯種子消毒技術

種子を温湯に浸漬することにより、当該種子に付着した有害動植物を駆除する技術をいう。

ケ) 抵抗性品種栽培・台木利用技術

有害動植物に対して抵抗性を持つ品種に属する農作物を栽培し、又は当該農作物を台木として利用する技術をいう。

コ) 熱利用土壌消毒技術

土壌に熱を加えてその温度を上昇させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術をいい、具体的には、太陽熱土壌消毒技術、熱水土壌消毒技術及び蒸気土壌消毒技術である。

サ) 光利用技術

有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止するため、有害動植物を誘引し、若しくは忌避させ、又はその生理的機能を抑制する効果を有する光を利用する技術をいい、具体的には、シルバーフィルム等の反射資材、粘着資材、非散布型農薬含有テープ、黄色灯及び紫外線除去フィルムを利用する技術である。

シ) 土壌還元消毒技術

土壌中の酸素の濃度を低下させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術をいい、具体的には、畑において有機物を施用するとともに、土壌中の水分を十分高めた上で、資材により被覆した状態を継続する技術である。

持続性の高い農業生産方式の一覧表

山梨県
平成20年4月

生産技術 作物名	土づくり		化学肥料低減技術			化学農薬低減技術											
	たい肥等有機質資材施用技術	緑肥作物利用技術	局所施用技術	肥効調節型肥料施用技術	有機質肥料施用技術	機械除草技術	除草用動物利用技術	生物農薬利用技術	対抗植物利用技術	被覆栽培技術	フェロモン剤利用技術	マルチ栽培技術	温湯種子消毒技術	抵抗性品種栽培・台木利用技術	熱利用土壌消毒技術	光利用技術	土壌還元消毒技術
普通作物	水稲(平坦地)	○	○	○	○	○	○	○					○				
	水稲(中山間地、高冷地)	○	○	○	○	○	○	○					○				
	麦類(大麦・小麦)	○		○	○	○	○	○					○				
	大豆	○	○	○	○	○	○		○	○							
野菜	トマト	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○
	きゅうり	○	○	○	○	○		○	○	○	○			○	○	○	○
	なす	○	○	○	○	○		○	○	○	○			○	○	○	○
	かぼちや	○	○	○	○	○	○		○	○				○		○	○
	ズッキーニ	○	○	○	○	○	○		○	○				○		○	○
	スイートコーン	○	○	○	○	○				○	○	○				○	○
	いちご(施設)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○
	ニガウリ	○	○	○	○	○		○	○			○				○	○
	キャベツ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○			
	はくさい	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	
	ほうれんそう	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○			
	こまつな	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
	野沢菜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
	冬菜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
	みずな※1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
	ねぎ	○	○	○	○	○	○	○			○						
	たまねぎ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○			
	レタス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○			
	カリフラワー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
	ブロッコリー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
	アスパラガス	○	○	○	○	○	○			○	○	○					
	だいこん	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○			
	にんじん	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
ごぼう	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						
さといも	○	○	○	○	○	○					○						
やまのいも※2	○	○	○	○	○	○					○				○		
ばれいしょ	○	○	○	○	○	○	○	○			○						
さやいんげん	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						
さやえんどう	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					○	
果樹	ぶどう	○	○	○		○	○	○		○	○						
	もも	○	○	○		○	○			○	○					○	
	すもも	○	○	○		○	○			○	○					○	
	おうとう	○	○	○		○	○	○		○	○						
	りんご	○	○	○		○	○	○		○	○					○	
	なし	○	○	○		○	○			○	○					○	
	かき	○	○	○		○	○				○						
	キウイフルーツ	○	○	○		○	○					○					
花き	うめ	○	○	○		○	○				○						
	ゆず	○	○	○		○	○				○						
茶	きく	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		
	ばら	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		
飼料作物	茶	○		○	○	○	○	○			○						
	飼料用とうもろこし	○		○	○	○	○							○			
	青刈りソルガム	○		○	○	○	○	○						○			
	混播牧草	○			○	○	○	○						○			
	イタリアンライグラス	○		○	○	○	○	○						○			
ライ麦	○		○	○	○	○	○						○				
飼料用イネ	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○				

※1「みずな」は、京菜、京水菜等を含む。
 ※2「やまのいも」は、やまといも、ながいも、いちょういも等を含む。